

TAMABI NEWS

Tama Art University News Magazine

vol.89

世界基準を、 超えていく。

EXPERIMENTAL WORKSHOP
Pacific Rim
Connecting Wool

大学人・造形作家としての軌跡

高橋史郎



世界基準を、 超えていく。



EWS

EXPERIMENTAL WORKSHOP

エクスペリメンタル

アピチャッポン教授のワークショップの様子。教室をクラスルームではなくリビングルームにしたいという教授のリクエストで、リラックスした雰囲気の中で行われた

国際的な舞台の第一線に立つ アーティストの息吹に触れる

EWSの立ち上げに際して、海外を拠点に今もっとも目覚ましい活躍をしている2名のアーティストを、特任教授として招聘しました。タイを代表する映画監督であり、2010年カンヌ国際映画祭最高賞(パルムドール)をはじめ、数々の受賞歴を誇るアピチャッポン・ウィーラセタクン教授と、ドイツ・ベルリン在住の世界的アーティストで、2019年に東京・六本木の森美術館で開催された個展「魂がふるえる」が大きな反響を呼んだ塩田千春教授です。

「国際的な舞台の第一線に立つアーティストの息吹に触れることは、院生の諸君にとって他には得難い体験となることでしょう。EWSのささやかにしてまた大いに野心的でもあるスタートに期待して下さい」(EWS長・建信哲学長/EWSの開設にむけてより)

また、主任教授にはメディア芸術コースの久保田晃弘教授が就任。スザンヌ・ムーニー助教(14年大学院博士後期修了)と共に、EWSの運営全般を担うほか、院生たちの制作面や語学面でのサポートも行っています。

研究領域にかかわらず履修可能 学部生も随時聴講できる

EWSは特任教授による約2週間の「集中ワークショップ」を軸として、学内外のゲスト講師による「レクチャーシリーズ」、主任教授と助教による「オープンゼミナール」の3つの柱で構成されています。週1回のオープンゼミと年8回程度開催されるレクチャーシリーズで、アピチャッポン教授と塩田教授のこれまでのあゆみや制作の背景、作品に関する理解を深め、そのうえで集中ワークショップに臨むというカリキュラムです。

大学院生は所属する研究領域にかかわらず、誰もが履修することができます。また、履修生以外の院生や学部生も、随時聴講や見学が可能です。

大学院には学部と同様、専攻ごとに充実したカリキュラムが設けられており、それぞれの特色を生かした研究教育と創作の方針によって、大きな成果を上げられました。EWSはそれらを礎に、本学が長年培ってきたアート・デザインに関する研究教育を、さらに発展させていくための新たな挑戦として、学科や専攻の枠組みを超え、国際的かつ継続的に実施していきます。

新たな創作の世界を開拓する 実験的プロジェクトが始動

2020年度後期より大学院生を対象とした「エクスペリメンタル・ワークショップ(以下、EWS)」を開設しました。多摩美術大学がこれまで培ってきた専門的な大学院教育を横断的に接続し、さらに国外から新しい風を導入するための窓としても機能するような、学際的かつ国際的な新プロジェクトです。世界の第一線で活躍するアーティスト2名を特任教授に迎え、『エクスペリメンタル(実験的)』の名のもと、予測不可能であると同時に、省察的な創作の世界を開拓する、学生主体のさまざまな取り組みが行われています。



ワークショップ

塩田教授は八王子キャンパスで対面のワークショップが実現。教授自ら、学生のテキストと「赤い糸」が絡まり合ったインスタレーション作品を教室内の一角に制作し、その様子を公開した

EWSを構成する3つの柱

集中ワークショップ	レクチャーシリーズ	オープンゼミナール
特任教授による10日～2週間の集中ワークショップ。日英バイリンガルで行う。	集中ワークショップに関連する特別講義。学内外のゲスト講師を招いて行う。	主任教授と助教による週1回のゼミ。事前リサーチや作品制作の準備などを行う。

「光」と「糸」をモチーフにしたロゴデザイン



アピチャッポン教授の映画から「光」、塩田教授のインスタレーションから「糸」のイメージを受け、それをモチーフに制作した。縦にも横にも使用できる可変的デザインで、複数のラインは領域横断的なプロジェクトであることを表現している。(デザイン:村松文彦)

世界的に活躍するアーティストを特任教授として招聘



Photo: Courtesy of Kick the Machine Films

アピチャッポン・ウィーラセタクン 教授

1970年タイ・バンコク生まれ、タイ東北部イサーン地方コーンケンで育つ。チェンマイ在住。タイを代表する映画監督でありアーティストでもある。カンヌ国際映画祭で、「ブンミおじさんの森」が2010年の最高賞(パルムドール)を、「メモリア」が2021年の審査員賞を受賞。

塩田千春 教授

1972年大阪府生まれ、ベルリン在住。「生きることは何か」を探索し、その場所やものに宿る記憶といった不在の中の存在感を糸で紡ぐ大規模なインスタレーションを中心に、立体や映像など多様な手法で制作。2019年、森美術館にて過去最大規模の個展「魂がふるえる」を開催。世界各地での国際展などにも多数参加。



Chiharu Shiota Berlin, 2020 Photo by Sunhi Mang

「なぜ作品をつくるのか」自己と向き合うワークショップ



アビチャップン教授の制作プロセスをベースにしたエクササイズの一例。外に出て自然の音を聞き、それに対して「何らか」の行動を起こす

結果を想定できない環境にあえて身を置く

EWSは当初、2020年度前期のスタート予定でしたが、COVID-19の世界的流行を受け、感染状況を鑑みて後期からの始動になりました。集中ワークショップの開講は年度末となり、アビチャップン教授は2021年3月1日から12日までオンラインでワークショップを実施。一時帰国がかなった塩田教授は3月19日から31日の間、八王子キャンパスに来校され、対面でのワークショップを行いました。久保田教授とムーニー助教に、EWSの狙いや初年度の具体的な取り組み、成果などについて伺いました。

「EWSはその名の通り、かつての『実験工房』のように、さまざまなジャンルの作家が集まって、議論したり制作しながら、未知のものごとに挑戦し続けるようなアクティブな場を、多摩美にインストールするものです。実験とは、何かしらの予感や確信はあったとしても、その結果を確実に予測することができない実践です。そうした場にあえて身を置くことの重要性を、自ら考えながら取り組んでいます」(久保田教授)

英語力ではなく、バリアをなくすことがグローバル

院生たちは学部で4年間でそれぞれの専門領域に関する知識や技術をすでに身につけています。そこからさらに自身の創作の世界を開拓するために、EWSで積極的に他の領域の院生と交流し、それぞれの知識や技術を掛け合わせることで、異なる思考や別の表現手法を見つけようとしています。

「英語でのワークショップも院生にとっては大きなチャレンジです。大学院は海

外からの留学生も多く、アビチャップン教授とのコミュニケーションも英語のみです。英語力は人によって異なりますが、できる限り自分の力でやってもらい、何かあればすぐ手を差し伸べられるようにしています」(ムーニー助教)

情報技術の発展により急速にグローバル化が進む現代社会では、さまざまな国の人とコミュニケーションを取ったり議論したりすることが、ますます身近になっています。英語に対する距離感が近くなれば、創作の視点や議論の場が多様になり、学生たちの潜在的な可能性を上げることができます。

「語学はもちろん重要ですが、英語が話せることがグローバルではなく、バリアをなくしてオープンなマインドになることこそがグローバルではないでしょうか。EWSでの体験が、ひとつのきっかけとなり、違う考え方や異なる価値観と共存していければ、と思います」(久保田教授)



アビチャップン教授の集中ワークショップ。教室に置かれた共有キャンパスに学生たちがさまざまな素材で思い思いに描き、完成することのない作品を制作した



塩田教授のインスタレーションにコメントを述べる建富学長(写真右)



オンライン個別面談は世界的アーティストと1対1で語り合える貴重な時間

世界的アーティストとの個別面談で 創造性を広げるきっかけをつかむ

「Visions from Chaos」をテーマに行われたアピチャッポン教授の集中ワークショップは、毎日メディテーション(瞑想)から始まります。教授のリクエストによりリビングルームのように模様替えされた教室で、自分自身と心穏やかに向き合う時間が設けられました。その後、教授の制作プロセスをベースにしたさまざまなエクササイズを行い、そこで感じたことを全員でディスカッションします。午後は教授と院生との個別面談というプログラムで、院生たちは日々新しいアイデアと出会いながら、各々の作品制作に取り組みました。

「普段とは違う開放的な雰囲気の中で、アピチャッポン教授は院生たちに、新たな気づきのきっかけとなるような言葉をたくさん投げかけてくれました。今日の、分断化した競争社会に流されがちな状況に対して、批判的にブレーキをかけるメッセージもあり、学生たちは自分にとって『本当に必要なことは何か』を、常に問いかけていました」(久保田教授)

塩田教授の集中ワークショップは「Shaping y/our fears」と題し、COVID-19の状況の中で、院生それぞれが持つ「恐れ」を顕在化して作品化することに取り組みました。院生との個別面談やゲスト講師を招いての特別講義、グループディスカッションなどを経て、各々のアプローチと成果物のプレゼンテーションを行い、建富学長や大学院の松浦弘明研究科長らも参加しました。塩田教授も《不確かな旅》(2016/2019)などの代表作で使用している「赤い糸」を使ったインスタレーションを教室の一角で制作し、院生と同様に講評を受けました。

「塩田先生は院生たち全員を、自分と同じアーティストとして考え、尊重していました。院生たちも先生の制作に興味を持ち、積極的に声をかけていました」(ムーニー助教)



塩田クラスで大学院グラフィックデザイン2年・倉本大豪さんの作品についてディスカッション。「EWSは自分の制作プロセスやアウトプットに大きな影響をもたらした」(倉本さん)



研究領域を超えた院生たちの交流はその後も続き、連絡を取り合いながら、お互いの展覧会に行き批評し合ったり、最近考えていることを共有したりするようになった

EWSでの経験が 創作活動の新たな原動力に

2人のワークショップに共通していたのは「なぜ作品をつくるのか」「なぜその素材を選ぶのか」といった、創作の根幹に関わる議論を重ねるところです。院生たちは教授との対話を通して、自らを見つめ直し、これまでの創作に対して、批判的な再考を促されます。個別面談の待ち時間などには、院生たち同士が議論を行い、夢のような、しかし非常に現実的な2週間を過ごしました。

「瞑想や物語の創作を行うことで、自分の外側から来る情報を取り入れて自分の内側にあるものと混ぜ合わせていくことの練習になった」(大学院油画2年・岩崎奏波さん)「グラフィックデザインの考えから少しアートのアプローチが変わってきた」(大学院博士後期2年・ワン チンさん)「もやもやした思考やドローイング段階のものを他の人に打ち明けるというオープンなプロセスへの変化が大きかった」(21年大学院油画修了・吉山明恵さん)

「制作のターニングポイントになった人や、作品そのものを大きく進化させた人もいます。EWSでの経験が自らのバリアを超えるきっかけとなり、創作活動の新たな原動力になることを願っています」(ムーニー助教)

EWSは今後も「実験」し続けるための場として、常に異なることにチャレンジしながら、その成果を日常の教育に落とし込んでいきます。

「国際的、学際的でオープンなプロジェクトを大学院に根付かせることで、大学教育全体のクオリティを少しでも高めていきたいと思っています。まずはEWSのような、仮設的であっても横断的な環境を、多摩美で機能させることが必要です。アートやデザインを取り巻く環境も日々変わっているので、日々アップデートしていくことが大切です。そのためにもEWSの活動を、末長く続けていきたいと思っています」(久保田教授)



オンラインでも時間と空間を超えたコミュニケーションが実現した。集中ワークショップの最終日にアピチャッポン教授を囲んで。写真後列左端にムーニー助教、後列右端に久保田教授

デザインの中で社会問題の解決を目指す 国際協働教育プロジェクト



パシフィックリム

Pacific Rim

Pacific Rimは、本学の海外協定校であるアメリカの美術大学、アートセンター・カレッジ・オブ・デザイン(以下、アートセンター)との国際協働教育プロジェクトです。世界のクリエイティブな現場で活躍する高度な専門知識と技術を兼ね備えた人材育成を目的に、2006年から実施されています。両校の学生たちが少人数の混成チームを組み、言語や文化の壁を越え、デザインの力によって環境保護や自然災害など生活に密接した社会問題の解決に取り組みます。



2006 DESIGNING ALONG FAULTLINES



Pacific Rim スタートの年。地震をテーマに都市やプロダクトなどさまざまな対策デザインを発表



2012 FUTURE CRAFT

異文化への理解を深め 国際性を身につける絶好の機会

Pacific Rimは1年ごとに開催地を交互に設定し、現地に3~4カ月滞在して共同研究を行う本学の留学プログラムのひとつです。例年、両校でのセレクションを経て選ばれた20名程度の学部生・大学院生が参加しています。

開催地にかかわらず、アートセンターの教員がメインレクチャーを担当し、講義はすべて英語で行われます。災害や環境問題、高齢化社会といった社会問題や、食文化や各国の伝統工芸など生活に密着した日常的な課題などをテーマに取り上げ、アート・デザイン之力でどう解決するかをグループごとに研究します。周辺地域へのリサーチトリップやディスカッションを繰り返し、研究成果を作品として発表します。

また、プロジェクト期間中は特別カリキュラムも用意され、テーマに関連したレクチャーのほか、語学研修にも参加することができます。

過去に行われた本プロジェクトで学生たちが制作した作品のいくつかは、IDEA (International Design Excellence Awards) や iF (Industry Forum Design Hannover) といった世界的コンペティションで受賞するなど、非常に高い成果を挙げています。

将来的に海外での展開を視野に入れている本学の学生にとっては、英語力の向上を図りながら異文化への理解を深め、コミュニケーション能力や国際性を身につける絶好の機会となっています。

世界的なコロナ禍で 両校の交流を継続する方法を模索

COVID-19の世界的流行の影響を受けた2020年、Pacific Rimは15年の歴史の中で2011年の東日本大震災以来2度目の活動中止を余儀なくされました。長年継続してきた本プロジェクトにおける大学間、学生間の交流をこのままストップさせてはいけないとの強い思いから、両校の教員間で協議を重ねた結果、オンラインでの開催を決定。2021年10月、「LIGHT × NATURE」をテーマに自然現象と生体模倣の視点から光と自然の融合について探求する3日間のオンラインプログラムを実施しました。両校の学生たちをミックスした少人数のチームでの共同研究というスタイルは変えることなく、アメリカと日本という地理的な距離と約17時間の時差を超えた交流が実現しました。



Pacific Rim 2021
テーマビジュアル



ArtCenter

世界有数の美術大学 『アートセンター・カレッジ・オブ・デザイン』

アメリカ・カリフォルニア州バサデナ市にあり、グラフィック、イラストレーション、プロダクト、映画やゲーム、自動車など、工業デザインに関わる領域を幅広く網羅した11の学部と7つの大学院課程を擁する美術大学。それぞれの分野で著名な卒業生を多数輩出している。1930年に広告会社の経営者によって設立。2021年12月現在、40カ国以上から集まった2,022名の学生が在籍している。本学とは1981年から交流があり、その中で生まれたこのPacific Rimプロジェクトは、環太平洋地域に属する2大学でより交流を深めながら、新しいデザインの可能性を追求し、世界へ向けて発信していこうという思いから名付けられた。



東日本大震災後の東北地方で地域社会の復興とデザインの可能性を追求



2016 FUTURE CRAFT2

タイ・チェンマイで持続可能な社会の実現とデザインの役割について考える



国・文化・言語の壁を越えて挑戦する 「交換留学の団体戦」

Pacific Rim 2021の様子がわかる
動画はこちらからご覧いただけます。



異文化体験が困難に打ち勝つ 強い力に

Pacific Rimは、両校の学生が未知の世界を自身の五感で体験し、多国籍の人間関係の中でいかに自分の個性を発揮できるかを試す場でもあります。2006年のプロジェクト開始時から運営に携わり、多摩美側のリーダーを務めるプロダクトデザイン専攻の和田達也教授にお話を伺いました。

「Pacific Rimの最重要ポイントは、日米の学生が混ざり合い、国・文化・言語、そして専攻の違いを超え、協働してデザイン研究を行うことです。いわば『交換留学の団体戦』。仲間と協力しながら最後までやり抜くことが、このプロジェクトの大きなテーマです」(和田教授)

過去15年のプロジェクトでは、アメリカと日本だけではなく「環太平洋地域」に属する国々の社会課題解決に取り組んできました。『Future Craft』をテーマとした2012年のジャパンステージでは、東日本大震災直後の東北地方で人々の生活に根を下ろした伝統工芸職人の業(わざ)を学びつつ、地域社会の復興とデザインの可能性を追求しました。2016年には本学を拠点にタイ・チェンマイでの活動を展開。現地で大量廃棄されるバナナの茎やウォーターヒヤシンスの繊維の再利用について提案し、持続可能な社会の実現とデザインの役割について考えました。

2017年のアメリカステージでは『ECO-RESEARCH LAB』をテーマに、コスタリカの大自然を体験。動植物の生態系や生物模倣から得られる観測結果をもとに、生物保護や社会的貢献を目指すデザインを多数提案しました。

「Pacific Rimでの3カ月間の異文化体験は、学生たちの将来において困難に打ち勝つ強い力になります。自分の殻を破り、枠を超えて飛躍的に成長できる絶好の機会です」(和田教授)

Pacific Rim初の試み 日米をつなぐオンラインプログラム

2021年度はPacific Rim初のオンラインでの開催となりました。学内選抜の結果、本学からは油画・グラフィックデザイン・プロダクトデザイン・テキスタイルデザイン・情報デザインと幅広い領域の学生・大学院生8名が参加しました。

プログラム初日は自己紹介と、事前に通知されていた制作課題「人と自然を結

びつけるお守り」についての発表がありました。「持つと魔法の力が湧いてくるようなもの」という条件で、両校の学生一人ひとりがさまざまな素材を用いて、このテーマからインスピレーションを受けて制作したお守りを発表しました。その後、両校の学生をミックスして2〜3人で1チームを編成し、「LIGHT × NATURE」という課題に対するデザインによる解決策を探る研究がスタートしました。

アートセンターのあるアメリカ・カリフォルニア州と東京では約17時間の時差があり、両校の学生たちがオンラインで無理なくつながれるのは日本時間の午前中のみです。チームの仲間と共にリサーチや実験を重ね、パソコン上で設計したプランに沿い、3Dプリンターをはじめとする学内の最新機材を利用し、試作品(プロトタイプ)の制作に取り組みました。各チームの制作状況の進捗を詳細に、



「LIGHT x NATURE」をテーマに3日間行われたオンラインプログラムの様子。写真左下はアートセンター環境デザイン学科長のデヴィッド・モカリスキ教授、右上が和田教授

かつ俯瞰して確認するため、オンラインホワイトボードツールの「Miro」を導入。ビデオチャットを組み合わせることで、離れていても円滑なコミュニケーションを実現することができました。

最終日には、1つ弱ると群全体に影響するという珊瑚の生態の特徴をコンセプトにした3種類の照明や、床に流氷の模様を投影するグラウンドライト、砂漠の植物をモチーフにしたペンダントライト、氷の世界を旅して暖かさや快適さを体験できるミニチュア照明など、チームごとに作品を提示して研究成果を発表。両校の教授陣による講評が行われました。



2017 ECO-RESEARCH LAB

コスタリカの大自然を体験し、生物保護や社会的貢献を目指すデザインを多数提案

国際交流の新たな可能性を開き 次年度以降の継続が決定

今回参加した学生たちは3日間のオンラインプログラムで、自身の将来や創作活動への手応えをつかみました。

「本来3カ月以上続くプロジェクトを3日間に凝縮したので大変だったが、チームが一丸となって協力し、話し合うことがとても楽しかった」(グラフィックデザイン3年・西山まゆさん)「ライトに関する実験やUVプリントなどの技法を、今後もインスタレーションや絵画などの作品に使いたい」(油画2年・ヤンシェジュンさん)「自分の専攻以外の世界を知ることができ、卒業制作にも影響を与えた」(テキスタイルデザイン4年・チンジュンネイさん)「専門領域にかかわらず作品に適合する表現形式を求めることが目標になった。良い作品を作るにはデザインの過程も重要なのだとわかった」(情報デザイン2年・サイボクカンさん)「色、質感、形など、それぞれに特徴があり、光も『素材』のようなものだと感じた。自然に関連したデザインや生物模倣の研究を通して、光や自然の美しさをもっと作品に取り入れていきたい」(プロダクトデザイン2年・コウハクブンさん)「アートセンターのリサーチを非常に大事にする制作スタイルがとても勉強になった。丁寧なリサーチによって得られる『見たい』以外に隠された作品の強度を大切に制作を行っていきたい」(大学院グラ

フィックデザイン2年・倉本大豪さん)「役割分担の重要性和自分の英語力の欠点を学んだ。将来映画に関わる仕事がしたいと思っており、周りと協力して全体の作業を効率的に進めることは今後ずっと必要になると考えている」(メディア芸術2年・谷地葵衣さん)「オンラインかつ言語や専攻の違いからさまざまな壁に直面したが、その中でも自分に今できることを見つけようとする意識が必要なのだと感じた」(油画4年・細川京佳さん)

両校がコロナ禍の遠隔授業で培ったスキルを有効活用して行った初の試みは、国際交流の新たな可能性を開きました。今回のプロジェクトを振り返り、アートセンター環境デザイン学科長のデヴィッド・モカルスキ教授は「今回のプロジェクトでエネルギーを得て、2022年秋の東京での交流に向けて期待が膨らみました」と述べ、和田教授も「今後はオンライン・オフラインの両面からより広い世界へ向けて国際協働研究の機会を広げていきたい」と話しました。オンラインプログラムが無事終了した2021年10月25日、本学の青柳正規理事がPacific Rimに関する覚書に署名し、両校で取り交わされ、活動の継続が決定しました。

「Pacific Rimは学生のみならず、双方の大学にとっても、相互に不足し、かつ必要なシステムやカリキュラムを学び持ち帰ることができる、大変意義のある取り組みとなっています。アートセンターとの長年の交流で築かれたかけがえのない『家族』のような信頼関係を、今後も長く続けていけたらと思っています」(和田教授)

Pacific Rimがもたらしたもの ~卒業生たちの声~

ロサンゼルスで建築デザインの仕事に



08年環境デザイン卒業
清水菜奈緒さん

初年度の06年と翌07年に参加し、地震をテーマに「さまざまな環境下で本当に機能するデザインとは何か?」についての協働研究を行いました。日本とは全く違うアメリカ流のデザイン教育を受けたことは非常に刺激的で、国際文化の違いなど多くのことを学ぶ機会となりました。卒業後は南カリフォルニア建築大学(SCI-Arc)の大学院に留学。人生のうちで最も勉強した期間でしたが、楽しみながら乗り切ることができたのは、Pacific Rimでの経

験があったからこそ。現在はロサンゼルスで建築デザインの仕事に携わり、22年の春からは非常勤講師として多摩美に戻ってまいります。Pacific Rimを含め、海外でのプロジェクトや留学に関心のある学生の皆さんと出会えることを楽しみにしています。



アートセンターでの徹夜のプレゼン準備の様子

常識に左右されないコミュニケーションを構築



20年プロダクトデザイン卒業
黒岡治さん

17年のPacific Rimで、コスタリカでのフィールドトリップに参加しました。大自然の中で過ごした経験は、私たちがいかに小さい存在であるかを再認識させられるとともに、都市であっても豊かな自然に囲まれたライフスタイルを送ることの重要性を考えるきっかけとなりました。制作をする上で重要だと感じたのは、活発なコミュニケーションの構築です。異なる環境、異なる文化の人たちとの共同制作は、自分の考え方の幅が広がり、より自由な

発想で物事をクリエイティブに考えられるようになりました。この経験のおかげで、仕事でも遊びでも常識に左右されない目線でのコミュニケーションを構築することができています。このプロジェクトに参加できて本当に良かったです。



サステナブルなプレハブ住宅ユニットを考案

ノルウェーの公的機関の助成を得て実施する協同研究 オスロ国立芸術大学との国際協同教育プロジェクト

Connecting Wool コネクティングウール



2018年にノルウェーで行われたJoint Studio 1『RAW』。環境保全地域へフィールドトリップ。ワイルドシープの繁殖地において羊毛刈り職人のデモンストレーションを見学した



Joint Studio 2『TECH』。桐生など繊維産地でリサーチを実施後、八王子キャンパスで集中ワークショップを実施した。各チームに分かれてディスカッションと実験を行い、ウール活用を探索した

2019年に在日ノルウェー大使館でJoint Studio 2『TECH』の成果発表を行った。多数の専門家を前にフィールドリサーチで得た視点に基づくウールの活用を提案した

2018年に始まった「Connecting Wool」は、本学とオスロ国立芸術大学との国際協同教育プロジェクトです。ノルウェー北部に生息する北方固有種、ワイルドシープの毛に注目し、新しい素材活用方法の探究に取り組んでいます。素材研究をベースにデザイン提案までを行いながら、人材の育成と教育メソッドの構築を目指しています。

環境保全地域のワイルドシープを訪ね、羊毛の活用方法を探索する

Connecting Woolはノルウェーの公的機関である教育国際協力センターの助成を受け、人物相互派遣を通じて国際交流を促進する「SIU-UTFORSK パートナシッププログラム」で採択されたプロジェクトです。プロダクトデザイン専攻の濱田芳治教授 (Studio 3 担当) とテキスタイルデザイン専攻の川井由夏教授 (Studio 3 担当) を中心にプロジェクトに参画し、テキスタイル・インテリア・ファニチャー・ファッション・アートなど、さまざまな領域が協働しながら進めることで、両校の国際交流をさらに深めることも意図されています。

2018年10月に共同ワークショップ・Joint Studio 1『RAW』では、プロダクトデザインとテキスタイルデザインの学生と教員がノルウェーに渡航し、オスロ芸大のメンバーと共にワイルドシープの繁殖地にある沿岸景観保全と地域文化に関する情報センターに滞在し、ワイルドシープや自然観察、羊毛関連企

業や紡績工場などでフィールドトリップを実施しました。両校の学生でペアを組み、オスロ芸大のスタジオでディスカッションや素材研究・実験を行いました。最終日にはサポート企業の方々やオスロ芸大教員の方々に前に、英語で研究結果のプレゼンテーションを行いました。

2019年のJoint Studio 2『TECH』では、3月にオスロ芸大からプロジェクトメンバーが来日し、全員で群馬県桐生市の織物工業や刺繍工場、伝統的な和紙工房などを訪問しました。その後、八王子キャンパスで集中ワークショップを実施し、各チームに分かれてディスカッションと実験を行い、ウール活用を探索しました。その研究発表は、在日ノルウェー大使館で実施し、ノルウェー文化に精通するファッションジャーナリスト、ノルウェーデザインを発信しているブランド関係者など多数の専門家を前に、各チームそれぞれがフィールドリサーチで得た視点に基づくウールの活用を提案しました。参加したテキスタイルデザインの学生からは「言葉の壁からコミュニケーションの難しさを痛感したが、相手

が伝えようとしていることは理解できるようになった。デザインという共通言語によるつながりを感じた」、プロダクトデザインの学生からは「イメージを立体的に説明できることが自分の強みだと客観的に知れた。新たな素材に出会えたことは大きな収穫となった」といった声が聞かれました。

コロナ禍を受け2020年度と2021年度は中止となりましたが、2022年秋にオンラインでの交流、2023年春には東京、秋にはオスロでの研究発表が予定されています。



「認識の過程」鹿野里美 (21年テキスタイルデザイン卒業) 鹿野さんは本プロジェクトを経て、古着や襦袢の反毛を羊毛と組み合わせた素材による作品を卒業制作として制作。「繊維製品の過剰生産や廃棄の現実」を問いかけた

まだまだ広がる国際交流の場

留学生が鎌水中学校1年生の授業「国際理解学習」に参加

2021年11月2日、本学留学生3名が大学の近隣にある八王子市立鎌水中学校を訪ね、1年生の国際理解学習に参加しました。生徒が留学生との交流を通じて多様な考え方や価値観に触れ、国際協調の重要性や難しさについて理解したいとする取り組みで、生徒による留学生の出身国についての調べ学習の成果発表を留学生が評価するコンペティション形式で行われました。

参加した留学生は「日本の中学生と初めて交流ができて楽しかった」(メディア芸術2年・コリチハラ モミさん/中国新疆ウイグル自治区出身)「中学生たちが自分の国について一生懸命調べてくれてうれしかった」(環境デザイン2年・ジャン ハヒョンさん/韓国出身)「自分とは年の離れた世代の日本人と交流することができて、とても貴重な経験だった」(グラフィックデザイン研究生・ハンソン アンナ ジュリアさん/スウェーデン出身)など喜びのコメントを中学生に伝え、双方に有意義な国際交流の機会となりました。



鎌水中学校の国際理解学習に参加した留学生。写真左からコリチハラモミさん、ハンソンアンナジュリアさん、ジャンハヒョンさん

中国・清華大学主催の教育大会に 建昌学長がオンライン参加

2021年10月29・30日、中国・清華大学主催の国際芸術デザイン教育大会で、世界各国の芸術系大学が参加して行われた学長サミットおよびシンポジウムに建昌哲学長と久保田晃弘教授がオンラインで登壇しました。学長サミットは「ポスト・パンデミック時代におけるアート&デザイン教育の課題と可能性」、シンポジウムは「新たな時間的・空間的条件の下における『新たな経験』とは」をテーマに、近未来の美術教育のあり方について意見交換が行われました。

また、世界各国50以上の大学から800名以上の卒業生・修了生が出席し、総出品数2,000を超えるオンライン展覧会も行われ、本学からはグラフィック・プロダクト・テキスタイル・環境・統合・劇美の28名が展覧しました。



学長サミットでポスト・パンデミック時代のアート・デザイン教育について見解を述べる建昌学長

共通教育×国際交流センターのコラボ企画「Talk de show」

「コロナ禍でも留学に関する有意義な情報を学生に届けたい」という思いから生まれた企画で、共通教育の教員が海外留学経験のある国際交流センター職員に、留学したきっかけや留学時の体験談、語学の勉強方法、複数言語を話せるメリットなどをインタビュー。昼休みの時間を活用しオンラインLIVEで実施しました。

【留学生インタビュー】世界の大学の中から多摩美を選んだ理由

日本画への憧れと 自然に恵まれたキャンパスが決め手に



(大学院日本画1年/クローアチア出身) **ブラナ クリスティナ**さん

以前、日本に留学した際に日本画を知り、その美しさに憧れて学びたいと思いました。他の大学にも合格していましたが、八王子キャンパスの自然に恵まれた環境の良さや先生方の作品を見て多摩美への入学を決めました。ボスニア生まれで戦争後に引越したクローアチアで育ち、多文化多言語を学ぶ中でひとつになれない自分を感じていることから、「アイデンティティの断片化」をテーマに制作しています。今後は指導教員の加藤良造教授のような幽玄の世界を描くことにもチャレンジしたいと思っています。

アーティストとして必要とする 全てのリソースがそろった環境



(大学院博士後期1年/キューバ出身) **カブレラ ヨンライ**さん

世界的なメディアアーティストである久保田晃弘教授のもとで学びたいと思い入学しました。アルゴリズムを基盤に「宇宙」をボタンひとつで操作できる「神」のような機械を作り、機械が人間をコントロールできる世界の是非について研究しています。多摩美で一つの領域を深掘りすることの大切さを学び、制作に対する考え方や目指す方向が変わりました。誰が見ても自分が作ったとわかるような作品を作りたいと思っています。多摩美は私がアーティストとして必要とする全てのリソースがそろった最適な環境です。



大学人・造形作家としての軌跡

高橋史郎

SHIRO TAKAHASHI

2021年7月18日に77歳で逝去された高橋史郎名誉教授は、50年以上にわたり本学の発展に公私ともに身をささげられ、卒業生初の学長となった人物です。大学人であり、日本におけるメディアアートの草分けとして国内外で広く活躍する造形作家「高橋士郎」であり、世界的に知られるイスラム数理造形の研究者「SHIRO TAKAHASHI」でもあります。本学への長年の貢献に対する感謝を込めて、その軌跡の一端をゆかりの方々のお話と共に振り返ります。



常に多摩美のことを考え、発展のために尽くす

大学院生、25歳で本学評議員に選出

高橋教授が多摩美に入学した1963年は図案科からデザイン科に名称変更が行われた年で、工業デザイン(立体)の1期生にあたります。同時期の本学には後にくもの派として知られる関根伸夫や吉田克朗、菅木志雄、メディアアーティストの幸村真佐男など錚々たる面々が在籍。高橋教授は文芸部の創設に携わり、同人「群鳥」の活動にも参加していました。日本を代表するインテリアデザイナーの剣持勇教授に教わり、67年に立体デザイン科を総代として卒業後は本学助手に採用され、翌年には大学院デザイン専攻に進みました。

一方で、60年代は日本の学生運動の全盛期でもあり、学内でも数々の紛争が起こっていました。高

橋教授が助手兼大学院生だった69年には1年間の全学授業停止が余儀なくされる事態に。当時の村田晴彦理事長のもと教育体制の建て直しを図るべく刷新された理事会で、高橋教授は私立学校法で定められた最年少の25歳で評議員に選出。翌70年には専任講師となり、以後長きにわたって本学の美術・デザイン教育を担うこととなります。

また、69年は高橋教授が「エレクトロマジカ展」で立体機構シリーズ《揺れる立方体》を発表し、造形作家としてデビューした年でもありました。建畠哲学長が初めて「高橋士郎」の存在を知ったのもこの時です。「シャフトで作られた、回転して揺れ動く塔のような作品で、その面白さに衝撃を受けるとともに高橋さんの名前が私の頭に刻み込まれました。作品から想像するにシャープでダンディでクー

ルな人という印象でしたが、実際にお会いするものすごくホットな方で、そのギャップにも驚きました」(建畠学長)

建畠学長は91年に芸術学科助教授、95年に同教授に就任しています。96年から教務部長を務めていた高橋教授に対し、より魅力のあるカリキュラムにするための改善を学科として再三要求していました。「すぐにはできないこともあるけれど、どんどん言いなさい、要求しなくなったらおしまいだよ、とおっしゃるんです。各学科がエゴイスティックに努力するエネルギーの総和こそが多摩美の原動力だと考えていらっしゃったんですね。とても大事な考え方であると納得しました。学園紛争の頃から常に多摩美のことを考え、発展させるために尽くしてきた人。深い愛を感じました」(建畠学長)

学生時代に造形作家デビュー

- 1963年 多摩美術大学デザイン科に入学
- 69年 大学院生、法定最年少25歳で本学評議員に
銀座ソニービル「エレクトロマジカ展」で
立体機構シリーズを発表、造形作家としてデビュー

- 1970年 デザイン科専任講師、大阪万博で巨大モニュメント制作
- 72年 銀座で初の個展開催。気膜造形を発表
展覧会ポスターを石岡瑛子氏が作成
- 73年 「第1回国際コンピュータアート展」企画・開催

- 1976年 助教授、日本デザイン学会で「ムカルナス」発表
- 78年 国際交流基金よりタイへ長期芸術家派遣
- 84年 新宿で個展「新しい空気膜ロボットの遊び展」開催

1960



文芸部の同人「群鳥」に参加する高橋教授(写真中央)
左は菅木志雄、右は幸村真佐男

1970

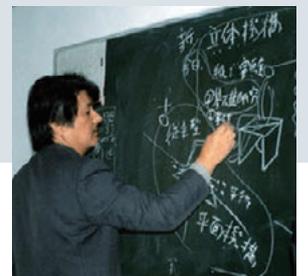


銀座ソニービル「エレクトロマジカ展」
造形作家としてデビュー

1980



ミシンで気膜を縫製する高橋教授



立体デザイン時代

年譜編集協力: 筋貴彦

世界を自分の目で確かめる

高橋教授は1970年にデザイン科立体専攻の専任講師、76年に同助教授、89年に同教授となり、後進の指導にあたりました。そのDNAを受け継いだ数多くの教え子たちが社会の第一線で活躍しています。中には高橋教授と同じように母校に戻り教壇に立つ人も。81年立体デザイン卒業生で現在教務部長を務めるプロダクトデザイン和田達也教授もその一人です。「講義の内容はものすごくスピーディかつ難解で、独自の言葉で表現されていた。僕らはなんとかして先生にくらいつこうと必死でした。心をぐつつかまれて、この人のもとで勉強したいという気持ちがあった。学生時代も、多摩美の教員になってからも、いつも土郎先生の背中を追いかけている気がします。そういう方に教えてもらったということが、僕の中のひとつのアイデンティティでもあり、誇りでもあります」(和田教授)

作家としての活躍も華々しく、70年の大阪万国博覧会で立体機構シリーズの巨大モニュメントを制作し大きな話題となったほか、72年には銀座で初の個展を開催、後の「高橋士郎」の代名詞ともなる気膜造形『バボット』を発表しました。71年にはフランスのシェル石油のデザインコンペティションで得た賞金でヨーロッパ各国横断1万kmを、75年にはオランダ・アムステルダムからイラン・イスファハンまでを車で走破。78年には国際交流基金よりタイへ長期芸術家派遣され、同国内のすべての美術学校を訪問するなど、世界を自分の目で、手で、足で確かめました。

73年に本学文様研究所の研究所員に就任し、幾何学文様研究を担当。76年には日本デザイン学会でイスラム数理造形研究「ムカルナス(回教建築の鍾乳石状装飾)」を発表し、本学の研究紀要にも創刊時から論文を投稿するなど、研究者としての活動も精力的に行いました。

世に先駆けて大学の情報化を推進

70年代からマイコン制御による作品を多数発表してきた高橋教授は、73年に「第1回国際コンピュータアート展」の開催に携わるなど、早くからコンピューターの可能性に着目していました。83年に株式会社ナムコからの寄付を得て国産パソコン「NEC9800シリーズ」を多数購入し、本学の情報化にいち早く着手しました。89年には上野毛の美術学部二部開設時にアップルジャパン社との4年間の産学共同研究を締結し、当時最先端の「Macintosh II」を30台導入。日本の大学での本格的なMac教育の先駆けとなりました。

高橋教授もインターネット草創期に自らのWebサイトを立ち上げ、作品や研究発表など活発な情報発信に活用する中で、情報技術の発展によりこれからの社会や美術を取り巻く環境が大きく変わることを見越し、本学の情報インフラ整備にも取り組みました。

思いやりのあるキャンパスに美は為る

美大初の情報デザイン学科を開設

96年、教務部長に就任した高橋教授は大学の教育改組に取り組みます。その一つが21世紀の高度情報化社会を見据えた新学科の設置です。芸術的創造性と情報工学技術とを兼ね備えた人材の育成を目指し、開設のためのメンバーを学内外から募集。97年に本学に着任した情報デザイン楠房子教授もその一人でした。「よく土郎さんのアトリエで会議を行っていました。毎回たくさんのパポットの中に隠れている土郎さんを探るところから始まるんです。楽しかったですね」(楠教授)

美術学部での情報関連学科の設置は前例がないことから申請は困難を極め、高橋教授と担当職員らは当時の文部省に十数回にも及ぶ訪問を重ねまし

た。工学部相当のカリキュラムと楠教授を含む博士4名の専任教員をそろえるなどの条件を整えてようやく受理されることとなりました。アメリカでGoogleが設立された98年、日本の美術大学では初となる情報デザイン学科を開設。高橋教授も同学科に移籍し、その基盤作りに参画しました。「まるで自分の子どもが生まれたかのように喜んでいました。数年前に大学設置分科会専門委員を務めたのですが、本当に新学科の設置は厳しい審査で、あの頃の土郎さんの苦勞が改めてわかりました」(楠教授)

メディアネットワーク構想の提唱

高橋教授が98年の教育改組と平行して取り組んだのが八王子キャンパスの再開発です。帝国美術学校に端を発し35年に上野毛で開学、53年に大

学化を果たした本学は、さらなる教育の充実を図るため、60年から4年間にわたり多摩ニュータウン最西部に約2万坪の土地を購入。68年に当時の石田英一郎学長が発表した「総合美術大学構想」に基づき、69年に現在の共通教育棟が完成しました。学園紛争後の71年に大学移転を開始し74年に完了したものの、東京都の多摩ニュータウン事業の停滞に伴い開発が頓挫。94年により校地の拡張が実現し、大規模なキャンパス建設計画が再開。教育・研究のソフトとハードの融合をテーマに、美術学生のための創作研究の環境づくりと大学の社会的使命の実現を目指しました。

現キャンパス設計室長の環境デザイン田淵諭教授は、83年に建築科(当時)の非常勤講師として着任した頃から高橋教授との交流があり、本学の建設

多摩美の改革・卒業生として初の学長に

1989年 教授、上野毛に美術学部二部開設
昼間は八王子、夜間は上野毛で授業を行う

92年 株式会社パポットを設立

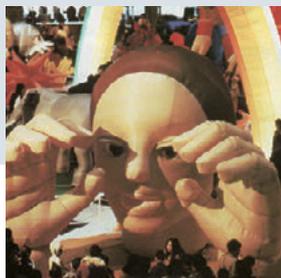
1996年 教務部長に就任
八王子キャンパスの再開発と教育改組を実施

98年 美術学部の改組転換
情報デザイン学科を開設、同学科教授に就任

2001年 メディアセンターが完成
オープン記念特別展覧会「INSIGHT VISION」開催
大学院美術研究科博士後期課程を開設

03年 多摩美術大学第7代学長に就任

1990



株式会社パポットを設立



八王子キャンパス再開発



メディアセンターに巨大パポット



第7代学長に就任

2000

計画にも長年にわたって携わっています。「広く学内から意見を募り、委員会で取りまとめたプランを理事会に提案するのですが、その中でも土郎先生はかなり早い段階から、メディアを中心とした新しい情報ネットワークの核を作らないといけないということを盛んにおっしゃっていました。いつも5歩先のビジョンを語る天才肌で、パッと聞くと奇抜に聞こえますが、その思考を追うと常に多摩美全体の行く末ばかりを考えていると感じられました」(田淵教授)

高橋教授がこれまでに興味関心を寄せてきた多角的で分散的で膨大な情報はすべて多摩美に収斂されている———ということは、高橋教授のWebサイトにも顕著に表れています。「ページに隠し部屋のような部分があって、それをクリックすると我々のキャンパスプランのヒントになるような情報をたくさんアップしてくれているのです。連絡はメールで一言のみ。一見、無愛想にも思えますが、内心はものすごく気遣いをされる方でした」(田淵教授)

社会とつながる美術教育の実践

2001年、八王子キャンパスに、本学の美と知の蓄積を共有し発信する場の一つとしてメディアセンターが完成。オープン記念特別展覧会「INSIGHT VISION / メディアの記憶と創造へ」では作家・高橋土郎の巨大パポットで建物に顔と手足が取り付けられ、多くの反響を呼びました。教務部長の任期が満了した03年、高橋教授は本学卒業生として初めて多摩美術大学学長に就任。持ち前のリーダーシップを発揮して引き続き改革を推し進めました。

05年、NHKの人形劇「三国志」「平家物語」などで知られる人形美術家・川本喜八郎氏の新作の撮影がメディアセンターで行われ、高橋教授も製作実行委員の一人として名を連ねます。高橋教授の立体デザイン時代の教え子であり、当時、NHKのデザインセンターで映像美術を手がけていた山下恒彦・現 劇場美術デザイン教授からの相談がきっかけでした。「川本

さんから折口信夫の幻想小説『死者の書』の製作の打診があったのですが、スタジオを長期間抑えるのが難しく、土郎先生に相談したところ、『学生も撮影に参加でき、川本さんから学べる機会になるなら』という条件で使用可と言っていたが、多摩美とのコラボレーション授業として実現したのです」(山下教授)

高橋教授は、多摩美の特長は商業デザイナーであった初代校長・杉浦非水の時代から社会と密接にかかわる美術教育にあるとし、在野の私学として産学連携にもしっかりと取り組むべきという考えを持っていました。1年以上にわたって行われた撮影の間、川本氏は客員教授として人形制作の指導にあたったほか、山下教授をはじめ映像スタッフの皆さんも持ち回りで特別講義を実施、学生たちに刺激を与え続けました。「入学早々に入試で描いたデッサンのことで声をかけていただいて以来、NHKに就職する時も多摩美の教員になる時も、私の人生の岐路にはいつも土郎先生がいた。恩師中の恩師だと思っています」(山下教授)

パポットが思想の体現を可能に

07年、日本を代表する建築家・伊東豊雄氏の設計による図書館をはじめ、情報デザイン・芸術学棟などが続々と完成し、八王子キャンパスの再開発が一段落。高橋教授が教務部長に就任した96年当時の本学の入学定員は約675名でしたが、学長在任中には1,000名を超える規模の大学にまで発展させました。再開発の完了を見届け、同年3月に学長の任期満了を迎えた高橋教授は、その後も情報デザイン学科で教鞭を執りつつ、最新のテクノロジーを活用した教材や作品作りを率先して実践し、教育と研究に、より一層の情熱を注がれました。

中でもマルセル・デュシャンやシュールレアリズムに深い影響を与えたフランスの小説家レーモン・ルーセル(1877-1933)に強い関心を持ち、その言語表現をメディア芸術の先駆けと捉えた論考「ルーセル考:自由芸術の発明」を09年に自身のWebサイトで

発表。ルーセルが小説の中で考案した装置を作品として再現しようと取り組みました。メディア芸術の港千尋教授をキュレーターに、04年情報デザイン卒業生で元助手の筋(あざみ)貴彦さんなど多くの本学関係者が関わり、13年3月、高橋教授の退職記念展として、高橋士郎個展「自由芸術展 ~レーモン・ルーセルの実験室～」が開催されました。

「士郎さんの場合は企画が持ち上がった段階でもうほぼ展覧会ができています。台湾(12年台北ビエンナーレ)の時も、あいちトリエンナーレ(16年)も、古事記展(20年川崎市岡本太郎美術館)も、構想は全部サイトにあがっていて、作品の制作も終わっている。僕たちがやったのは、それをどう解釈して、どう人に伝えるかということ」(港教授)「今までもサイトに載っている画像やテキストから士郎さんの思想を紐解いて展覧会やカタログを作った。同じ布陣であればこれからも、いくらでも士郎さんの展覧会ができると思います」(筋さん)

高橋士郎の思想が無限に体現される——膜体内部の空気圧を駆動力とするシンプルな構造で故障が少なく、自在にサイズを変えられることができ、組み替えることもできる、気膜造形『パポット』の持つ特性が、それを可能にしています。「ルーセル展も古事記展も同じ作品を組み替えて発展させたもの。士郎さんのクリエイションの一つの『型』でもあります。次はジュール・ヴェルヌもやりたいと言っていた。サイトにはまだ隠されているものがあるかもしれない。これがゴールという感じはありません」(港教授)

高橋ビジョンの継承と進化

自由自在に出現と消去を繰り返し、日常の中に非日常を演出する『パポット』は、ダイナミックでありながら、丸みを帯びてやわらかく、人間的な温かみもあり、高橋教授そのもののようにも感じられます。「パポットは優しいテクノロジーで、子どもが気軽にさわることができるアート。あらゆる規制を乗り越え

あくなき探求心とクリエイティビティ

2005年 メディアセンターで川本喜八郎監督の
人形アニメーション映画『死者の書』撮影開始
製作実行委員に就任

2011年 東日本大震災復興支援活動
「デイリリー・アートサーカス」に参加(代表:開発好明)
12年 台北ビエンナーレ 港千尋キュレーション
「瓢箪美術館」に出品

2013年 多摩美術大学を退職 3331 Arts Chiyodaにて
「自由芸術展~レーモン・ルーセルの実験室～」開催
20年 川崎市岡本太郎美術館にて
「高橋士郎 古事記展 神話芸術テクノロジー」開催

2010



学生と談笑する学長時代の高橋教授



レーモン・ルーセル展での作品「ダントンの首」



古事記展「涙の神」(撮影:港千尋)

るといのが士郎さんの思想で、『自由芸術』と言っていたのはそういう意味もあったのでは。もっとアートを楽しんでいい。教育も研究も制作も『楽しい』という気持ちがいちばんで、士郎さんの根底にはいつもそうした夢があったと感じます」(港教授)

現在、港教授、メディア芸術の寺井弘典教授、筋さんから情報デザイン学科有志で、学内に高橋士郎研究会を設置する計画が持ち上がっています。「士郎先生のところに行ったら絶対おもしろい!」と思って高橋ゼミを選び、助手時代には学生から『士郎語の翻訳者』と思われていたこともありましたが、士郎先生は天才肌の研究者で偉大な作家でもあります。自分で自分を広報して売り出すという方ではなかったため、いわゆる美術史として語られることがあまりありません。高橋士郎の魅力や功績をもっと広く示したい。高橋士郎の研究者になりたいという気持ちになりました」(筋さん)

高橋教授のアトリエのある株式会社パポットは上

野毛キャンパス南門から徒歩約10秒のところがあり、2,000体を超えるパポットがコンパクトに収納され、その出番を待ち構えています。13年に退職された後も高橋教授はアトリエに行く傍らキャンパスに立ち寄り、学生や教職員らとの交流を楽しんでいました。「学長室にもふらっと来られ、いつも多摩美の歴史を教えてくださいました。高橋先生のビジョンはいまも大枠として継承されており、本学の中興の祖といっても過言ではないでしょう」(建畠学長)

20年10月の古事記展終了後からは、本学の歴史に関する資料の収集や論考の執筆にあたられていました。論考は高橋教授のWebサイトで公開されており、そこには孔子の論語から『仁里爲美*(仁に^おるを美と爲す)=人への思いやりをベースにするのは、美しく立派なことである』という言葉の引用と共に『思いやりのあるキャンパスに美は為る』と書かれています。「高橋先生はいつも能動的に、活動的に動くことに意欲を燃やす人。おとなしく維持するとい

うことでは取まらない。今後もある程度の流動性を持ちながら、新しい要素を付け加え、大学を進化させていく必要があると考えています」(建畠学長)

* 論語の表記は「里仁爲美」

取材協力:
建畠哲 学長、和田達也 教務部長/プロダクトデザイン教授、
楠房子 情報デザイン教授、
田淵諭 キャンパス設計室長/環境デザイン教授、
山下恒彦 劇場美術デザイン教授、港千尋 メディア芸術教授、
筋貴彦(04年情報デザイン卒業) *掲載順
米山建彦(アートアーカイヴセンター)、稲垣雄介(キャンパス設計室)
有馬拓也、政木裕太(株式会社パポット)



撮影:古屋和臣

トピックス

ヴァーチャル大学「Tama Design University」を開校

本学TUB企画・運営による東京ミッドタウン・デザインハブ第94回企画展「Tama Design University」を2021年12月1日～26日に開催しました。社会の課題や変化と向き合わなければならない現在、何をデザインすべきか問い直すため、誰もが受講できる期間限定の大学を仮設。拡張するデザイン領域の先端にいる実践者や研究者を招き「我々は新しい世界をどうデザインできるのか？」を共通テーマに50の講義を開講し、ヴァーチャル大学を体現する展示も行いました。SNSを中心に話題を呼び、YouTubeでもライブ配信した講義は配信後2週間で再生数10万回を突破し、来場者も4,000名を超えました。講義動画はアーカイブ視聴できるものがあるほか、学びを深める場としてMiroを使った「SCREEN LAB.」を設置しています。



統合デザイン・深澤直人教授による講義の様子

学生の10m絵画『走る』をモデルルームに展示

油画3年・上原咲歩さんと加藤優奈さんの『走る』が、南大沢駅前イトーヨーカドー内の仮設モデルルームギャラリー通路壁面に展示されています。これは、八王子市鎌水に建設中のマンション運営を行うファーストエポリューション株式会社が、モデルルームのギャラリー通路壁面に絵画を展示したいと環境デザイン学科に相談したことから、日本画・油画専攻の3年生以上を対象に「10m絵画コンペ」を実施。審査を経て2人の共作プランが選ばれたものです。ウェルビーイングという事業テーマが体現されていることや見る側にエネルギーを与えること、多様性が表現されていることが評価されました。2人には賞金30万円のほか制作費20万円、ベニア板12枚が支給され、約1カ月をかけて高さ1.8m、幅10.8mにおよぶ大作が完成しました。



石膏チョークを手に持ち、走りながら描く上原さん

博士後期課程20周年イベントを開催

博士後期課程の創設20周年を記念し、2021年11月23日～12月9日にアートテックにて展覧会、11月23日にはレクチャーホールにてシンポジウムを開催。また学位授与者一覧や担当教員座談会、修了生の今などが収録された記念誌が発行されました。シンポジウムでは、李禹煥名誉教授と建畠哲学長が登壇して本学博士後期課程の起源を振り返るセッションに続き、美術大学における博士後期課程の意義を学外ゲストと語るセッションが行われ、本学の特色を再認識するようなイベントとなりました。



「アーカイブの思想」第1部の様子 撮影：齋藤彰英



博士後期課程20周年記念シンポジウム 第1セッションの様子

膨大な資料体の「思想」を探る

2021年12月4日、第4回アートアーカイブシンポジウム「アーカイブの思想」をオンラインで開催しました。第1部でアートアーカイブセンターの今年度の成果報告を行い、第2部ではミシェル・フーコーの専門家を迎えて多義的なアーカイブの思想を深め、第3部ではアーカイブの境界や異端のネットワークに注目した研究発表を行い、アーカイブの可能性を広げる1日となりました。

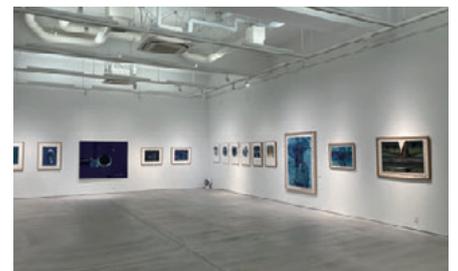
海老塚教授の退職記念展を開催

2021年12月4日～2022年1月17日、多摩美術大学美術館にて「海老塚耕一展 空無から生じる風景一開く・可視」を開催しました。これは芸術学・海老塚耕一教授の退職記念展で、新作の彫刻、版画作品とともに初公開の作品図面なども出品され、作家としての現在と足跡が示されました。1月12日にはレクチャーホールにて最終講義が行われ、収録映像は後日配信予定です。



「海老塚耕一展」会場風景 撮影：望月孝

教授の退職記念展「深淵の杜」が開催されました。教員生活の集大成としての展覧会に加え、丸山ゼミ卒業生14名による「未来展+α」と題した冊子も発行。会期中の12月15日にはレクチャーホールにて最終講義が行われました。



「深淵の杜」会場風景

2021年度の卒制展ポスター決まる

今年度の卒業・修了制作展ポスターデザインコンペで、最優秀賞にメディア芸術1年・神谷佳吾さん、優秀賞に情報デザイン3年・JUNG Jieyunさんと統合デザイン4年・小笠原勇人さんが選ばれました。神谷さんには賞金20万円が授与され、広報物、目録表紙のデザインに採用されます。



左から最優秀賞の神谷さん、優秀賞のJUNGさん、小笠原さん

丸山教授の退職記念展を開催

2021年12月10日～24日、アートテックギャラリーにて共通教育元教授である丸山浩司名誉

プロダクトデザイン学生の交流企画

2021年11月24日、プロダクトデザイン専攻studio1で学ぶ3年生が企業に作品を発表する「第9回公開プレゼンテーション」を行いました。YouTube LIVEを使った会場に57社の企業から136人が参加。学生たちは2カ月半という短時間で公式サイトを立ち上げ、ヴァーチャル展示空間も開発しました。また、11月29日にはstudio2の3年生による「屋台トーク2021 - デザインの、マルチステークホルダーダイアログ」を開催。こちらはアートトークギャラリーでの作品展示(11月27日~30日)と、オンライントークセッションとで構成し、限定公開のウェブサイトでも関係者とのコミュニケーションを図りました。

JFWジャパン・クリエイションに出展

テキスタイルデザイン専攻と八王子織物工業組合による産学共同研究「八王子織物プロジェクト2021」成果発表が12月7日~8日、日本最大の織維見本市「JFWジャパン・クリエイション」にて行われました。協力企業のインテリアブランド、イデー(IDÉE)の2021年のディレクションに即しクッションカバーのためのテキスタイルをデザインしました。2022年2月18日~28日にはイデーショップ自由が丘店にて展示を行います。

のん監督の映画作品に撮影協力

女優のんさんが脚本・監督・主演を務めた映画『Ribbon』の撮影協力をしました。コロナ禍で多くの卒業制作展がなくなり、青春を奪われていく学生たちの悲しみを目の当たりにしたのんさんが、世の中の擦り切れた思いを少しでも救い上げたいという思いで企画した、美大生の再生物語です。上野毛・八王子の両キャンパスで撮影が行われ、学生らもエキストラ出演しました。映画は2022年2月25日の公開です。



映画「Ribbon」 2月25日(金)よりテアトル新宿ほかロードショー
©「Ribbon」フィルムパートナーズ

TCLが特定一般教育訓練講座に指定

「TCL—多摩美術大学クリエイティブリーダーシッププログラム」が厚生労働省の特定一般教育訓練講座の指定を受けました。一定の条件を満たした場合、教育訓練経費の40%がハローワーク(公共職業安定所)より支給されます。指定は2021年10月1日から、適用は第5期からです。

研究活動

2021年度 科学研究費助成事業 採択者

● 基盤研究(B)(一般)

植村朋弘教授(情報デザイン)

- 幼児のアートの思考を伴うプロジェクト活動における学びの変容を可視化する実証的研究 深津裕子教授(共通教育)
- 日本の文様デザインアーカイブの創造—東西文化交流と近代デザインの視座から

● 基盤研究(C)(一般)

鶴岡真弓名誉教授

- エルミターージュ美術館所蔵「黄金の鹿」の神話と造形象象—「生命再生の鹿角」の研究 笠原恵実子教授(彫刻)
- 擬態のアメリカ美学—アースワーク作品にみるアメリカの生成と先住民文化の流用— 佐賀一郎准教授(グラフィックデザイン)
- 美術—デザイン史概念を共有・育成するデザインアーカイブ群の構築 久保田晃弘教授(情報デザイン)
- インタラクションの圈的モデルとそのアーカイブ化 森脇裕之教授(情報デザイン)
- メディアアート作品の修復・復元作業から見た作品分析方法の研究 湯澤幸子教授(環境デザイン)

- 70年代の大野美代子のインテリア・橋梁にみる領域横断的デザインの可能性 大島徹也准教授(芸術学)
- もう一つの抽象表現主義史—抽象表現主義者たちの自主的集団活動についての考察 菅俊一准教授(統合デザイン)
- 手がかりの提示による空間における身体誘導のための新しいメディア表現方法論の研究 木下京子教授(共通教育)

- 近世杉戸絵に関わる総合的研究 中村寛教授(共通教育)
- 在米の仏像と仏具およびアーカイブ調査—寺宝流出と古美術商、収集家の関係とその実態 高梨美穂准教授(共通教育)

- アメリカ社会の暴力と反暴力・脱暴力の試みに関する人類学的研究 高梨美穂准教授(共通教育)
- 移動表現の母語習得と認知発達メカニズムの解明

● 挑戦的研究(萌芽)

金沢百枝教授(芸術学)

- エトルリアを基軸とした文化的連続性とその研究領域の確立

● 若手研究

後藤正矢講師(共通教育)

- 大学における幼稚園教員養成の歴史的研究 中嶋英樹講師(共通教育)
- 1880年代から1920年代の英国小説における「散漫な注意」の技法 堤涼子助教(大学院) ※2021年8月31日付退職

- 住まいの屋外空間における生活者によるデザインの実態とプロセスの研究 陳芴宇助教(大学院)

- 近代日本画における画紙の特質による技法の展開

- 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)) 深津裕子教授(共通教育)
- 台湾の文様デザインアーカイブの創造—アジアの少数民族文化の固有性の記録—

- 研究成果公開促進費(研究成果公開発表(B)(ひらめき☆ときめきサイエンス~ようこそ大学の研究室へ~KAKENHI)) 深津裕子教授(共通教育)
- テキスタイルデザイン入門:古布を刺し子でリサイクルしながらSDGsについて学ぼう 高梨美穂准教授(共通教育)
- 成長することは—不思議なオノマトペの世界を絵本で表すワクワク体験講座!

インの実態とプロセスの研究
陳芴宇助教(大学院)

- 近代日本画における画紙の特質による技法の展開

- 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)) 深津裕子教授(共通教育)
- 台湾の文様デザインアーカイブの創造—アジアの少数民族文化の固有性の記録—

- 研究成果公開促進費(研究成果公開発表(B)(ひらめき☆ときめきサイエンス~ようこそ大学の研究室へ~KAKENHI))

- 深津裕子教授(共通教育)
- テキスタイルデザイン入門:古布を刺し子でリサイクルしながらSDGsについて学ぼう

- 高梨美穂准教授(共通教育)
- 成長することは—不思議なオノマトペの世界を絵本で表すワクワク体験講座!

2021年度 科学研究費以外の公的な助成事業 採択者

- [独立行政法人日本学術振興会]二国間交流事業 共同研究・セミナー 木下京子教授(共通教育)

- アーサー・トレス・コレクションの研究と目録化

- [文化庁]文化芸術振興費補助金(メディア芸術アーカイブ推進支援事業) 森脇裕之教授(情報デザイン)
- 山口勝弘ビデオ彫刻アーカイブ事業

- [日本私立学校振興・共済事業団]学術研究振興資金 深津裕子教授(共通教育)

- 日本とアジアの群島を結ぶ文様研究(副題:先端メディアによるデザインアーカイブ構築)

- [国立研究開発法人科学技術振興機構]戦略的創造研究推進事業(CREST) 領域:(ナノエレクトロニクス) 素材・デバイス・システム融合による革新的ナノエレクトロニクスの創成 濱田芳治教授(プロダクトデザイン)

- 超高速・超低電力・超大面積エレクトロミズム「エレクトロクロミックデバイスの美術応用」

- [経済産業省]省エネルギー等に関する国際標準の獲得・普及事業委託費 楠房子教授(情報デザイン)

- 超省エネ反射型壁面表示タイルユニット(電子タイル)に関する国際標準化

人事異動

※1月5日時点の情報です。

新規採用

- 教務部入試課

坂本陸月 主事補(2021年11月1日付)

- 学生部学生課

水谷明 主事補(2021年12月1日付)

- 総合企画部広報課

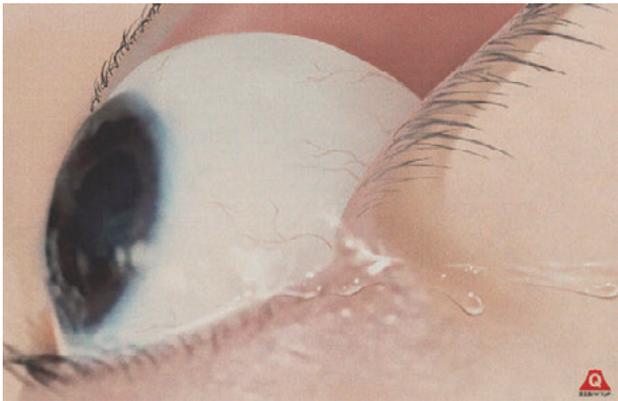
周かほる 主任(2022年1月1日付)

受賞

学生が最高賞の朝日広告賞を受賞

朝日新聞社が主催する「2020年度 第69回朝日広告賞」一般公募の部で、グラフィックデザイン3年・篠宮沙良さんが最高賞にあたる朝日広告賞を、15年グラフィックデザイン卒業・大石知足さんと同3年・合田有希さんが準朝日広告賞を受賞しました。また同3年・藤本春さん、水口透子さんが入選、同3年・栗本真亜人さん、山下潤さんが学生奨励賞を受賞、統合デザイン3年・対馬自由莉さんが学生奨励賞に加え、総票数1,107票の自由投票で最多得票を得て朝日新聞読者賞を受賞しています。

朝日広告賞は1952年の創設以来優れた新聞広告を顕彰し、広告文化の発展に寄与してきた歴史ある賞です。今回発表されたのはコロナ禍で延期されていた2020年度のアワードで、一般公募の部では1,207点の応募がありました。



『ヒューン!』篠宮沙良 富士急行による課題〈遊園地「富士急ハイランド」〉

修了生が「FACE2022」グランプリを受賞

新進作家の動向を反映する「FACE2022」で、07年大学院油画修了・新藤杏子さんがグランプリを、05年大学院日本画修了・矢島史織さんが優秀賞を受賞しました。また、日本画3年・マツシタユキハ.さんと21年大学院油画修了・飯島ひかるさんが審査員特別賞を受賞。総勢17名の学生・卒業生が受賞・入選を果たしました。

SOMPO美術財団が主催する本コンクールは今年で10回目の開催となります。「年齢・所属を問わず、真に力がある作品」を公募するもので、今年は全国から1,142名の応募がありました。三次の「入選審査」と「賞審査」を経て、国際的に通用する可能性を秘めた入選作品83点、うち受賞作品9点が決定しました。



『Farewell』新藤杏子

デザインコンペでグランプリ

「TOKYO MIDTOWN AWARD 2021」で、18年グラフィックデザイン卒業・根岸桃子さんのユニットonegiが、デザインコンペ部門のグランプリを受賞しました。また統合デザイン4年・有留颯紀さん、小笠原勇人さんが優秀賞を、アートコンペ部門ではファイナリストに選出されていた彫刻4年・柴田まおさんが優秀賞を受賞しました。グランプリ作品は時計を窓に飾ることで外を見る行為を日常化した『窓時計』。室内で過ごすことの多い、現代人と太陽の関係をリデザインするコンセプトで、デザインのアイデアが高く評価されました。デザインコンペ受賞作は2022年11月まで東京ミッドタウン3Fに展示されています。



『窓時計』onegi(太田文也、根岸桃子)

ポスターアワードで金賞

「JAGDA国際学生ポスターアワード2021」で、統合デザイン3年・香川晴美さんが金賞と審査員賞を受賞しました。また学生、卒業生25名が入

選しています。本アワードは公益社団法人日本グラフィックデザイン協会(JAGDA)主催による、国内外の優れた若い才能の発見と顕彰、およびグラフィックデザインの新たな発展と進化を目的に創設されたものです。今回は「Move」をテーマに作品を募集。第一線で活躍するデザイナー12名の審査により各賞が選出されました。入賞、入選作品の展覧会は2021年11月24日～12月6日、国立新美術館にて行われました。



『あの場所を目指して』香川晴美

シェル美術賞で多数の受賞者

次世代を担う若手作家のための公募展「シェル美術賞2021」で、08年造形卒業・赤池奈津希さんが木村絵理子審査員賞を、油画1年・松浦美桜香さんがユアサエポシ審査員賞を、同4年・石川ひかるさんが学生特別賞を受賞したほか、12名の学生、卒業生が入選しました。展覧会は国立新美術館で2021年12月8日～20日に開催。今後の活躍が期待される過去の受賞・入選作家を応援する「シェル美術賞 アーティスト・セレクション(SAS)2021」も同時開催され、19年大学院油画修了で油画助手の町田帆実さんと20年大学院油画修了・許寧さんが選出されました。

笠間陶芸大賞展で審査員特別賞

「笠間陶芸大賞展2021」公募部門で、大学院工芸2年・百崎優花さんと12年同修了・林麻依子さんがそれぞれ審査員特別賞である小山登美夫賞、石崎泰之賞を受賞しました。本展は茨城県陶芸美術館の開館20周年を記念して行われたものです。公募部門ではジャンルを問わず、優れた発想と技術による陶芸作品を募集。全国から548点の応募があり、147点が入選、うち13点が入賞しました。入賞、入選作品の展覧会は2021年10月16日～2022年1月16日、茨城県陶芸美術館で開催されました。



『静華』百崎優花 画像：茨城県陶芸美術館提供

文化功労者に青柳理事長

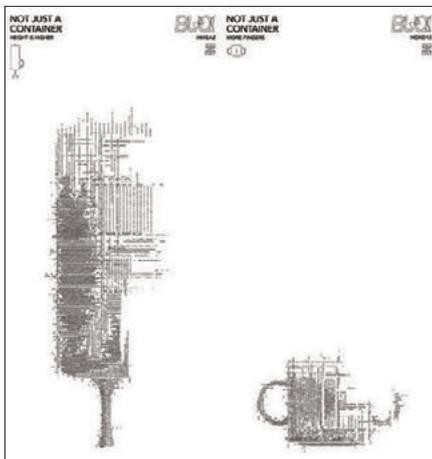
2021年度の文化功労者に青柳正規理事長が選ばれました。この制度は日本の文化の発展に関し、特に功績が顕著な者を顕彰するものです。1951年の制定以来、昨年度までに915名が顕彰されており、今年度は21名が選ばれました。

アーティゾン美術館が金賞に

環境デザイン・米谷ひろし教授が代表を務める TONERICO:INC. がデザインしたアーティゾン美術館が「SKY DESIGN AWARDS 2021」インテリア部門にて金賞を受賞しました。本アワードはカナダに本部を置くオンラインマガジン、Merci Magazine 社によって創設されたアワードで、今回はカナダ、香港、日本をはじめアジア各国からの参加がありました。

日本タイポグラフィ年鑑ベストワーク

大学院グラフィックデザイン2年・郭思嫻さんが「日本タイポグラフィ年鑑2022」の学生部門でベストワークを受賞しました。これはグラフィックデザイナーをはじめとした国内外の会員で構成される特定非営利活動法人日本タイポグラフィ協会が毎年発行しているもので、海外でも評価の高いタイポグラフィ・デザインの記録誌です。郭さんの作品が収録される年鑑は4月に発行されます。



『不器——遺伝因子の復活』郭思嫻

日本版画会展で新人賞

版画の全国公募展「第62回日本版画会展」で、大学院版画2年・大久保春霞さんが新人賞を受賞しました。本展は版画芸術を通じて文化振興への寄与を目的に毎年開催されており、今年度は395点の応募がありました。展覧会は2021年11月26日～12月2日、東京都美術館で開催されました。



『Summer Valentine』大久保春霞

レザープロダクトのコンペで最優秀賞

国内最大のレザープロダクトコンペティション「ジャパンレザーアワード2021」でプロダクトデザイン4年・若井田健太さんが学生部門最優秀賞を受賞しました。若井田さんは床革と膠を用いた撓め革のスツールを提案。武具の製造時に皮を膠液に浸し槌で打ち固めるという、1,000年前にあった技法を新たな用途で利用した作品です。武具のイメージから家具をつくるコンセプト、伝統技法と素材に着目した点が評価されました。



『THL』若井田健太

卒業制作が審査員賞を受賞

21年油画卒業・宮林妃奈子さんの卒業制作『La Face Sauvage』が「アートアワードトーキョー丸の内2021」で審査員賞(建畠哲賞)を受賞しました。本アワードは若手アーティストの発掘・育成を目的とした現代美術の展覧会です。全国18校の卒業修了制作展を訪問し、5,200点以上から発掘したノミネート作品172点より26作品を厳選。2021年9月16日～29日に丸ビル、丸の内オアゾ、TOKYO TORCH Parkの3会場にて展示されました。



『La Face Sauvage』宮林妃奈子
「アートアワードトーキョー丸の内2021」展示風景 撮影:木奥恵三

CAF賞で審査員賞

学生作品を対象としたアワード「CAF賞2021」で、大学院油画2年・佐藤菜々栄さんと大学院情報デザイン2年・花形慎さんが審査員賞を受賞しました。また大学院日本画2年・オウギョウユウさん、油画3年・白川真史さん、21年日本画卒業・GILLOCHINDOX☆GILLOCHINDAEさんが入選しました。本アワードは学生の創作活動の支援と日本の現代芸術の振興のため公益財団法人現代芸術振興財団が主催するものです。入賞、入選作品展は2021年11月24日～28日、東京・代官山のヒルサイドフォーラムで行われました。

登り窯をモチーフにした住宅で銅賞

大学院環境デザイン2年・野尻勇気さんが「木の家設計グランプリ2021」にて銅賞を受賞しました。これは株式会社木の家専門店谷口工務店が主催する学生対象の木造住宅設計コンテストで、今回のテーマは「コロナ時代に考える職住一体の住まい」。7名の建築家が審査にあたり、最終審査は公開プレゼンテーションとして配信されました。野尻さんは朝鮮半島の伝統的な床暖房「オンドル」を暮らしの中心に据えた住宅を提案し、「今の文明に暮らす人々が見失ったものを取り戻す、懐かしくも新しい提案」と評価されました。



『薪を焚きオンドルと暮らす登り家』模型

富山の〇をつつむパッケージデザイン

富山デザインフェア2021「パッケージデザインコンペティション」で、グラフィックデザイン4年・田中美羽さんが富山スガキ株式会社賞を、統合デザイン4年・北野歩実さんが朝日印刷株式会社賞を受賞しました。富山市の主催による本コンペは、将来のデザイナーの技術力向上を目的としてデザインを学ぶ学生から夢のある楽しいパッケージデザイン作品を公募。今年度は「富山の〇をつつむ」をテーマとして、全国から235点の応募がありました。作品展は10月1日～3日、富山市民プラザにて行われました。



『富山のイカ墨をつつむ』田中美羽



『富山の蒲鉾をつつむ』北野歩実

インテリアのアワードで学生ら6名が入賞

公益社団法人日本インテリアデザイナー協会が優れたデザイン作品や関連活動の表彰を行う「JID AWARD2021」にて、環境デザイン4年・李豪さん、21年同卒業の加々美洸介さん、田中千絵さん、山下開晴さん、永田爽寧さん、氏家実咲さんの6名が試作や提案を対象としたネクストエイジ部門賞を受賞しました。加々美さんは審査員賞(入江可子賞)も受賞しています。受賞作品展は2021年11月25日～30日、リビングデザインセンター OZONEにて開催されました。

卒業制作展



美術学部卒業制作展・大学院修了制作展B日程

実施学科・専攻・コース＝グラフィックデザイン、プロダクトデザイン、芸術学、統合デザイン、演劇舞踊、劇場美術デザイン

会期＝3月13日[日]～15日[火]

場所＝八王子キャンパス



3月13日から始まるB日程では、上記6学科・専攻・コースが八王子キャンパスで展示を行います。いずれの会場でも、感染症対策に必要な措置を講じます。このほかにも、各学科や個人・グループ単位による学外展が各所で開催されています。詳しくはホームページでご確認ください。

ポスターデザイン学内コンペで最優秀賞を受賞した情報デザイン1年・神谷佳吾さんの作品

多摩美術大学美術館



多摩市落合1-33-1 | 10:00～17:00(最終入館16:30まで) | 火曜休館 | 一般＝300円 / 20名以上の団体＝200円 (障がい者および付添者、学生以下は無料、卒業生も校友会カードの提示により無料)

3月2日[水]～15日[火] ※8日は休館、15日は開館。本展は入館無料 多摩美術大学博士課程展2022

2001年度に開設された多摩美術大学大学院美術研究科博士後期課程は、本年度第19期の学位取得者を出すことになりました。本課程は、美術・デザインにおける創作と理論の両面において高度の素質を備えた人材の養成を目的としています。院生たちは絵画・デザインほか、それぞれの研究分野に取り組むとともに、相互の討議を通じて幅広い視野を養ってきました。その研鑽の成果を問うべく第19回博士課程展を開催します。

アキバタマビ21



タマビが運営する新しい創造の場 3331 Arts Chiyoda内にあるアキバタマビ21は、若いアーティストたちが展覧会を行うスペースです。卒業後のキャリア形成支援を目的としており、企画から広報物・アーカイブ作成まで自ら手掛ける企画展を、年間約8回開催しています。千代田区外神田6-11-14 3331 Arts Chiyoda 201・202 | 12:00～19:00(金・土は20:00まで) | 火曜休館 | 入場無料



1月8日[土]～2月13日[日] 第94回展「power/point」

8名のグラフィックデザイナーによる展覧会広報物の展覧会。展覧会広報物の特殊性や取りまく状況、デザイナーの制作とはいかなることか検討する。

出品作家＝小泉桜、竹内康陽、竹久直樹、網島卓也、中村円香、中村陽道、星加陸、八木幣二郎

2月21日[月]～3月26日[土] 第95回展「日常茶飯事」

自身の観測する日常を頼りにしてものをつくる4名の作家による展覧会。「日常」の意味を少し拡張し、それまで言い表せなかった日常のあり様を立ち上げる。

出品作家＝小林明日香、田中雄斗、張静雯、檜垣春帆

本学の新型コロナウイルス感染症対策に準じて、開場時間や内容が変更となることがございます。HPで事前に確認してからご来場ください。

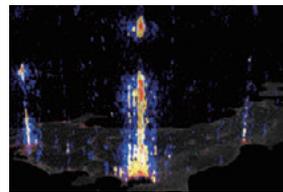
「TAMABI NEWS」では受賞や活動報告を募集しています。総合企画部(TEL:042-679-5715 / e-mail:news@tamabi.ac.jp)までお知らせください。

多摩美術大学 TUB



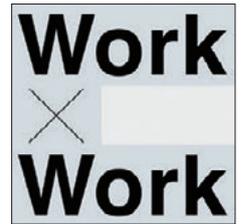
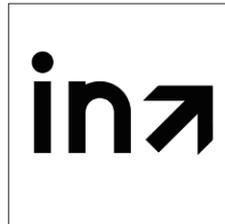
“まじわる・うみだす・ひらく”をコンセプトに、オープンイノベーションによる価値の創出、幅広い層に向けたデザインやアートプログラムの提供、学生作品の展示・発信を通してデザインとアートの持つ創造性と美意識を社会とつなぐ場を提供しています。

港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー 5F(東京ミッドタウン・デザインハブ内) | 11:00～18:00 | 日曜・祝日休館 | 入場無料



1月28日[金]～2月12日[土] 企画展「Visible x Invisible —ビッグデータと次世代の情報表現—

ビッグデータとデータヴィジュアルイゼーションをテーマに、次世代の情報可視化作品をインタラクティブに展示する。



2月16日[水]～26日[土]

企画展 「矢印の原理展(2.0)」

3月1日[火]～12日[土]

※最終日のみ17:00まで

多摩美術大学 助手展サテライト 「Work x Work 仕事と作品」

展覧会・公演

2021年9月18日[土]～2022年2月27日[日] 横尾忠則現代美術館

大学院 | 横尾忠則 客員教授 横尾忠則の恐怖の館

2021年11月6日[土]～2022年4月6日[水]

Chengdu Tianfu Art Park(中華人民共和国)

油画 | 中村一美 教授

Super Fusion -2021 Chengdu Biennale- (成都ビエンナーレ2021 スーパーフュージョン)

1月14日[金]～4月3日[日] 東京国立博物館 平成館

青柳正規 理事長(総監修)

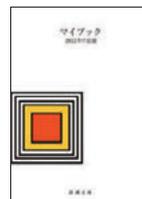
特別展「ポンペイ」

1月21日[金]～2月19日[土] Tezukayama Gallery

彫刻 | 木村剛士 講師

Directors' Selection -FOCUS

新刊



マイブック
—2022年の記録—
大貫卓也 企画・デザイン
(グラフィックデザイン | 教授)
新潮社 | 2021年10月1日刊 | 440円(税込)



音と耳から考える
歴史・身体・テクノロジー
久保田晃弘 論考執筆(メディア芸術 | 教授)
アルテスパブリッシング |
2021年10月25日刊 | 5,500円(税込)



七十人訳ギリシア語聖書
ベン・シラの知恵、ルツ記、
哀歌ほか
秦剛平 訳(名誉教授)
青土社 | 2021年11月19日刊 | 12,100円(税込)

